

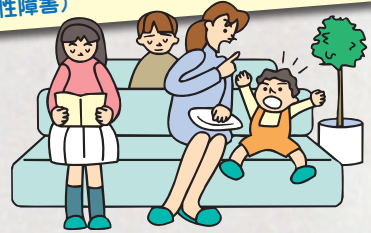
こころ の 健康

～思春期の心の悩みと病～

千葉県医師会 橘川 清人 医師



落ち着かない子ども -ADHD 理解編- (注意欠陥・多動性障害)



子どもというのは、本来落ち着きがなく、活発に動きまわって、周囲の大人をハラハラさせるものですよね。しかしそれが限度を超え、その子の日常生活に差しつかえが生じるようであれば、何らかの手立てを工夫しなければなりません。

このような「通常の限度」をこえて落ち着きがない子どもの多くが、ADHDを持っているとされます。授業中でもじっとしてられず、立ち歩く・他の子にちょっかいを出す（多動）、すぐにカットして手が出る・順番が待てない（衝動性）、気が散りやすい・忘れ物が多い（不注意）などの特徴を持つ子どもたちです。これらの特徴は、ADHDの子どもが持つ2つの脳のはたらきの弱さに由来するとされています。

- ①ある目的のために、行動を順序立てたり、抑えたりするはたらき。
- ②何かを得るために、待つべきときには、待つというはたらき。

ADHDは「脳の発達上の機能障害」によって生じるのですが、実際のところその原因はまだよく分かっていません。先の「通常の限度」というのも、社会や文化によって異なります。正常と障害の境がハッキリしているわけではないのです。それでは、なぜ「障害」として「診断」するのでしょうか。主な理由が2つあります。

「障害」として診断する理由

1. 誤解を受けることが多いから

- ①子どもへの誤解…勉強には集中できないのに、ゲームには長い時間集中したりするので、しばしば「できるのにやらない」「やる気がない」と誤解されます。実際には「分かっているけどできない」「やりたくてもできない」のです。
- ②親への誤解……子どもがルール違反ばかりしていると、「親のしつけができていない」「愛情不足」と言われたりします。本当は、「親こそ、人一倍苦労しているのに」です。

2. ある程度有効な手立てがあり、それが子どもの育ちを左右することがあるから

手立てには、薬物療法と子どもへのかかわり方の工夫があります。この手立て、対応については、次回に述べます。